

「環八郎湖」／流域の再生に賭ける夢

谷口吉光（秋田県立大学）

1月24日、昭和町の羽城中学校で「環八郎湖・流域の未来シンポジウム」という題名の集会が開かれた。「環八郎湖（かん・はちろうこ）」。「聞き慣れない言葉だと思うのも無理はない。このシンポジウムを主催した秋田地域振興局が作り出した新造語なのだ。

いうまでもなく、八郎湖はかつて日本第二の湖だった八郎潟を干拓した時に残された湖だ。今でも八郎潟の5分の1に当たる約4500ヘクタールの面積と20を越える流入河川を擁する大湖である。八郎潟時代には「八郎太郎」の伝説で親しまれたこの湖も、今では湖岸がコンクリートで固められ、水辺に近づく人もまれになり、農業排水や生活排水の流入によって水の汚ればかりが議論される可哀想な存在になってしまった。水質改善のためのさまざまな取り組みが20年にわたって続けられてきたが、いまだに明確な改善の兆候は見えていない。

「環八郎湖」という言葉には、八郎湖の水質をめぐるこうした閉塞感と無気力感をうち破り、地域住民の手で流域の再生を果たそうという呼びかけが込められている。集会の資料はその目的をこう記している。「今回のシンポジウムは八郎湖だけを切り離してとらえるのではなく、約10万人という流域の人々の営みを包み込む水の流れ、すなわち“循環する水系”という視点に立って、さまざまな形で八郎湖とかかわりながら暮らしている多くの人々が、“新たな水郷の創出”に向けた手法について語り合い、協働していく場が広がる契機となることを願って企画しました」。

この呼びかけが通じたのか、シンポジウム当日には主催者の予想を大幅に越える450人の聴衆が詰めかけた。いかに多くの人々が八郎湖の再生に関心を持っているかがわかる。著名な講師による3本の講演のあと、地域の実践者5人が壇上に並んでパネルディスカッションが行われた。そこでは「環境創造型農業」に取り組む大潟村の話、環境改善活動に取り組む女性農業者の話、流入河川の水量減少によって農業用水の確保に苦勞する土地改良区の話などが出た。困難な状況下でもあきらめずに地道に活動を続ける実践者の報告は、会場の人々に勇気と希望を与えただろう。

こうしてシンポジウムは成功裏に終わったが、本当の挑戦はこれからだ。八郎湖流域は2市11町村にまたがり、流入河川の上流に広がる森林、中流域の里山、下流の水田と市街地、果ては防潮水門を隔てて日本海に至る多様な地形を含んでいる。当然、産業や暮らしのあり方によって土地や水の利用形態も多様であり、無数の利害が絡み合っている。一言で「流域再生」といっても、取り組むべき課題は山積しており、性急に解決を求めても失望を味わうだけだろう。

多様な住民が協働できる場（プラットフォーム）作りが最初の課題になるだろう。閉鎖性水系の再生をめざすこのプロジェクトが、地域に新たな展望を切り開くことを期待したい。

（朝日新聞「あきた時評」 2004年2月14日掲載分を加筆・修正した）